

### (イ) 振り返りシートより

振り返りシートは、児童自身が、学習した英語を使って友だちとコミュニケーションを図っていることを意識できているかアセスメントできるように設問内容を工夫した（資料14、15参照）。活動の振り返りでは、「楽しかった」だけではなく、自分の頑張ったことや友だちとのやり取りを通して活動を楽しんだこと、グループワークで協力したこと、友だちの発話の内容から気付いたことなどを具体的に書く児童が多くなった（図10・11）。意欲的に活動に参加し、友だちと関わったことで得られる成果であると思われる。

また、振り返りシートには、一人一人の記入内容に応じて、できるようになったことや気づきを褒めるコメントを書き、自信に繋がるように配慮した。2学期末の外国語活動授業アンケートでは、「振り返りシートの先生のコメントを読んでいる」の項目に31名が肯定的な回答をした。

### (ウ) 学期末に行う外国語活動授業アンケートより

（資料9参照）

外国語活動授業アンケートより、思いや考えを伝え合うことに関連する項目の分析を行った。その結果、問7「学習した英語を使って発表することは楽しい」の項目に「そう思う」と答えた児童は14名（1学期）から18名（2学期）に増えた。また、問10「英語を使って発表しやすい雰囲気だ」に「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた児童は22名（1学期）から27名（2学期）になった。1学期に「どちらかといえばそう思わない」と答えた12名の児童の内9人が2学期には「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた。また、3学期にがんばりたいことについての記述部分に「発表」について書いている児童が12名であった。消極的だった「発表」に対して意欲的に捉える児童が増えたことが、アンケートから実証された。

問11「もっと英語を使って話せるようになりたい」の項目に「そう思う」と答えた児童は20名から23名に増えた。12月に実践した「マッチングゲーム」と「自分の行きたい国についてのプレゼンテーション」については33名の児童が「楽しく参加できた」「どちらかといえば楽しく参加できた」と答えた。やり取りや発表に意欲的になってきていると考えられる。

### (イ) 第2回Q-U結果と第1回Q-U結果比較より

第2回Q-U結果（図12）と第1回Q-U結果（図6）を比較すると、非承認群に属する児童

●グループの友達発表はどうだったかな。チェックしてね。

友だちの名前	声の大きさ	表情	I can see～ が言えた。	I can eat～ が言えた。	頑張っていたこと
	○	○	○	○	
	○	○	○	○	さへう
	○	○	○	○	しっかりひきはさといえていた

大振り返り

●今日のめあてを確認しましょう。  
行きたい国を友だちに発表しよう。

●今日の活動について、あてはまるマークに○を置こう。

めあてを達成して、積極的に参加できた。	自分の行きたい国について、誰かと同じに考えることができた。	友だちの意見から、新しい発見があった。	友だちが困っているときに、助けることができた。（言いにくい時など）
○	○	○	○

●今日の目標は達成できたかな。巻でA・B・Cに○をつけよう。

●自分の発表を振り返ってみよう。

声の大きさ	表情	I can see～ が言えた。	I can eat～ が言えた。	頑張っていたこと
○	○	○	○	声を入りました。

●今日の発表で頑張ったことや、感想を書きましょう。

今日のこのか'人はったことがやくになったので、よかった  
 今でか'はった? 頑張った!  
 しっかり発表外伝えることができた! good job! ②

図10 振り返りシート2

●自分の発表を振り返ってみよう。

声の大きさ	表情	I can see～ が言えた。	I can eat～ が言えた。	頑張っていたこと
○	○	○	○	はまりとまごてい

●今日の発表で頑張ったことや、感想を書きましょう。

日本以外、外国のいいところを見ることができた。  
 すばらしい! 発表までできて、外国のいいところを知ることができた!  
 しっかり発表しました! very good! ②

図11 振り返りシート3

が第1回には8名であったが、第2回の結果では4名になり、【学級満足度（いごちのよいクラスにするためのアンケート）】の間6「あなたは自分の思ったことや考えたことを発表したとき、クラスの人たちはひやかしたりしないで、しっかり聞いてくれるとおもいますか。」の回答は「とてもそう思う」と答えた児童が16名から20名に増え、「そう思う」を含めると30名であった。学級で自分が認められているという意識をもつ児童が増え、友だちが自分の発表を聞いてくれるという安心感が高まったと思われる。また、個々の回答を確認すると、1学期には発表時友だちにどう思われているか不安を感じていた児童の意識に変化が表れた。

しかしながら、【学校生活意欲（やる気のあるクラスをつくるためのアンケート）】の間5「授業中に先生の質問に答えたり、自分の考えや意見を言うのは好きですか」に否定的に答えた児童は17名であり、2名増加した。そのうち「そう思わない」と答えた6名の児童については、被侵害得点は低く、承認得点も高いため、関係性の不安よりも学習に対する不安感や自信のなさが発表への不安に繋がっているのではないかと思われる。

また、学校生活不満足群が4名になり、2名増えた。特に被侵害得点の高い児童C児は、学習意欲に関する質問については全て「とてもそう思う」と回答している。普段の様子C児は発表への意欲も高く、挙手をして堂々と大きな声で発表でき、また、友だちとのトラブルの報告もなく、いろいろな友だちと交流ができています。粕谷(2010)は、日常の観察の印象より「被侵害得点」がとくに高い場合は、実際に友だちとの関係にトラブルを抱えている可能性と、不安が強く、侵害されることに対して強く反応しやすい可能性を考えて接してみると、理解が進むことがあることを指摘している。C児は、観察の印象とは異なっているため、侵害されることに対して大きな不安を抱えている可能性が考えられる。

第2回Q-Uの結果（図12）を見ると、第1回より学校生活満足群の人数が減っている。しかしながら、研究協議を行った結果、以下の結論に達した。

①非承認群が8人から4人になったことは、本当にすごいことである。関係を築く取組を大変頑張った結果である。

②児童の姿から見て、関係性が明らかに良くなっている。

③数字だけ見れば、数値が下がっているものもあるが、担任が児童の実態を観察していて、その原因は理解できている。担任が感じている授業の雰囲気や児童の行動の変容は数値には表れないこともある。

④被侵害得点の高い児童が自ら発表したことはすごいことである。被侵害についてアンケートに回答したことは、担任に気にかけてほしい気持ちの表れであることも考えられる。

### ウ リフレクション(Reflection)

外国語活動でのコミュニケーション活動を通して、児童同士の関係性を築く取組では、授業記録・児童観察、授業の振り返

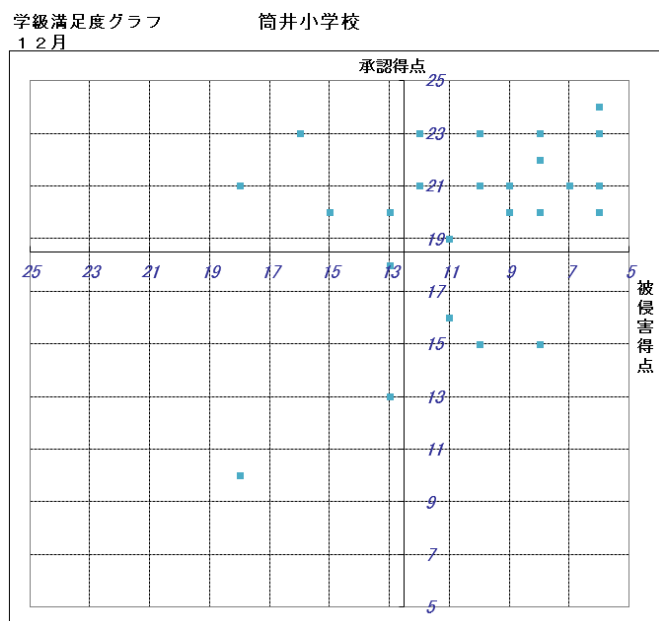


図12 第2回Q-U（12月）プロット図

りシート、学期末に行う外国語活動のアンケート、Q-Uより発表時の不安は和らいだことは明らかになった。また、固定していた関係も横のつながりを意識した役割交流などの活動を通して、お互いに協力し、児童同士の関係の輪は広がっている。

また、慣れ親しむ活動を充実させた結果、学習した定型文を使って自分の思いや考えを伝え合うやり取りや発表の活動には参加できるようになった。ペアワークのパートナーが替わるとき、Hello. や Thank you. も自然に出てくるようになった。外国語活動授業アンケートにも記述していたが、意欲的に発表したいという気持ちをもった児童も増えている。発表している友だちを見て、「自分もそうになりたい」と感じている。友だちの発言をしっかりと聞こうという態度は養われてきている。

今後さらに、被侵害得点の高い児童が安心して他の児童と交流できるよう関係性を高めていくことを確認した。

### (3) 1月～3月 (Phase 3)

#### ア 現状分析とゴール設定 (Action Plan)

指導者としては、自分の思いや考えを発表する機会を与え、子どもたち一人一人が活躍する場をさらに増やしていきたい、そして、自分が言いたいことを一方的に伝えるだけでなく、相手の表情や答えによって既習事項を使ったやり取りを展開してほしいという願いがある。自分の発話や発表を聞いてくれるという安心感は高まってきたが、さらに高まるよう関係性を築く取組を続けていくこととする。外国語活動授業アンケートにより、学習に対する不安を抱えている児童も把握することができた。言語材料が増えているため、単元を通して段階的に語彙を増やしていき、楽しく活動に参加しているうちに使えるようになったという状態になる活動内容をさらに工夫する必要があることが分かった。

以上のことより、引き続き「児童の関わり合いや横のつながりがある活動を取り入れた授業展開」をゴールに設定し、取組を継続する。

## 5 結果と考察

### (1) 結果

#### ア 学級全体の変容

4月当初、児童は英語に苦手意識があり、授業での発表や発話の声が小さく、活動に消極的な姿勢が見られた。ペア学習やグループ学習でもコミュニケーションを図ることができずに黙り込む児童や、授業に集中できない児童もおり、伝え合い活動において大きな課題を抱えていた。

しかし、授業改善や関係性を高める取組を進めていく中で、自信をもって英語を発話することができ、誰とでもコミュニケーションを図ろうとする姿勢が見えてきた。ペアワークやグループワークといったコミュニケーション活動を多く取り入れ、必然的に他の児童と協働学習を行ってきたことにより、困り感を抱える児童を他の児童が支えたり、助けたりする場面が増えてきた。その結果、苦手意識をもつ児童も安心して発話したり、活動にチャレンジできたりする機会を多くもてた。Phase 1では全員が積極的に授業に参加でき、Phase 2では、英語に対する自信がさらに高まり、Small Talkで指導者から質問されても、落ち着いて返答する様子が見られた。

1学期の外国語活動授業アンケートでは、26項目中20項目に否定的な回答をしていた児童が、2学期には27項目中24項目に肯定的な回答をするようになり、さらに「英語を読めるようになりたい」と記述するという変容もあった。

授業において、伝え合い活動を活性化させるために行っていた役割交流により、考えや思いを伝え合うことへのハードルが低くなり、児童は友だちと協力し、認め合い、自分への自信を高めたことが分かった。

## **イ 個別児童の変容**

### **(7) A児の変容**

A児は対人関係に不安を抱えており、低意欲の傾向があった。外国語活動では、当初より発話の声小さく、ペアワークやグループワークでも友だちとあまり関わることをしなかった。1学期の振り返りシートの自己評価の欄では全て否定的な回答をした。さらに、1学期の外国語活動授業アンケートではほとんどの項目で「あまりそう思わない」と回答していた。学級における不安が顕著であるためだと思われる。

9月からの実践で役割交流の取組においては、必然的に役割を与えられるためペアやグループと関わらざるを得ない環境を作り、指導者が支援しながら活動に取り組んだ。少しずつではあるが、活動に取り組むことができ、当初友だちと関わることを避けていたA児が友だちと一緒に笑顔で活動できる機会が増えていった。2学期末に実施した外国語活動授業アンケートでは「授業が好きだ」「もっと英語を使って話せるようになりたい」という項目で肯定的な回答になった。

### **(4) B児の変容**

B児は、自分の興味関心を優先してしまう様子が見られた。自分の気持ちをコントロールすることが難しく、興味関心が低いと机に伏せてしまうことも多くあった。特に反復練習が始まると意欲が下がってしまう傾向が見られた。基本的な学力は高く、高度な思考をすることができるが、コミュニケーション活動は苦手で、1学期はActivityへの参加が少なかった。しかし、9月からの実践では授業中に意欲的に活動できる時間が増えた。高学年になり、普段の学校生活でも自分の思いを伝える経験が増えたことや、周囲の友だちも自分のことを認めてくれていると感じたことで、安心感を得ることができたのではないかと考えられる。

## **(2) 考察**

本研究では、外国語活動授業アンケートやQ-U、振り返りシートといった客観的データに基づいた児童理解を基盤に、授業改善や取組を進めてきた。指導者の主観が入らないデータを活用したことにより、主観では気付かなかった児童一人一人の抱える課題を発見できたことは大きな成果である。その上で、児童のもつ課題を克服させるために、伝え合い活動を取り入れた授業改善を行ったことで、子どもたちの課題の一つであった外国語活動への参加意欲の向上や、英語に対して自信をもつことができたと思われる。

### **【授業記録の有用性】**

客観的なデータの一つとして、授業記録を取った（資料1、3～8、10～13）。普段の授業では、指導者が気付いたことをメモする程度でも良いと思われる。授業記録を取ることで指導者の見えていなかった気付きが得られ、教員が設定したゴールに到達したのか検証を行う際の客観的なデータを得ることができる。また、次時の授業を構成していく際に、学習において課題を抱える児童への個々の対応を考案する上で大いに参考になる。

本研究では、継続的に観察をすることで、児童の変容についての評価や指導者の授業力の向上にもつながり、自分自身や学級を振り返る良いデータとなった。

### **【役割交流の効果】**

伝え合い活動を充実させるためには、児童同士の良好な関係性が不可欠である。しかし、児童

の実態として高学年になると、思春期に入り自己開示の一つであるコミュニケーション活動に抵抗を感じる児童も少なくない。そこで用いたのが役割交流である。以前は、グループでの話し合いにおいて発言力のある児童の意見に引っ張られ、伝え合わずにその場をやり過ごしていた児童もいたが、役割交流では、自分の仕事が明確に与えられることで必然的にグループで活動をしなければならない状況になる。良好な関係性を築くことができなかつた児童や、自分の考えを表出できない児童にとっては、コミュニケーションを図ることを意図的に強いることで、コミュニケーションスキルを高めることにつながった。7月と12月の結果を比較すると非承認群の児童が8人から4人に減少したことは、取組の中で学級の中で認められるという安心感が高まった結果であると考えられる。

#### 【コミュニケーション活動のポイント】

外国語活動において、自分の思いや考えを伝え合うコミュニケーション活動を多く取り入れたことで、児童に伝え合い活動の楽しさに気付かせることができた。伝え合い活動の基盤となるのは、自分の考えや意見を聞いてもらえるという安心感であると考えられる。実践を進めていく中で、その安心感を得るためには、学習に対して自信をもつことも重要であることが見えてきたため、外国語活動の授業では既習事項を繰り返して練習することで発話に対する不安を無くすことに取り組んできた。さらに、相互評価をすることで、他人の自分への評価が自信につながった。

#### 【外国語活動におけるQ-Uの活用】

アセスメントを行うことで、授業や日常生活で担任として関わってきた中で見えてきた児童の課題以外にも、今までの授業の見取りからは発見できなかった他の児童のもつ課題が顕在化し、より多くの児童の課題に当てはまる取組を進めることができた。

児童観察だけでは捉えにくかつた児童の内面をQ-Uを行うことで気付くことができ、指導者自身が児童一人一人と学級全体を捉える機会となった。そして、ARの手法を用いて児童の理想の姿、指導者として理想とする自身の姿を明確にすることにより、自分自身がゴールを設定し、手立てを考え、実践し、経験や勘だけに頼らず、客観的データも活用したアセスメントをしてリフレクションすることで、自分自身の指導力の向上と子どもたちの伝えたいという気持ちの向上に繋げることができた。

## 6 今後の課題

外国語活動でのコミュニケーション活動を通して、積極的に周りの人たちと関わり合い、自分の思いや考えを相手に分かってもらえるように工夫して伝える力と、相手の話す内容をしっかり聞き、相手の伝えたいことを分かろうとする姿勢を育てたいと思い本研究に取り組んだ。関わり合う活動を充実させたことで、いろいろな友だちとコミュニケーションを図れるようになり、外国語活動での児童の表情は笑顔がいっぱいになった。また、授業改善により、児童の授業への意欲は明らかに高まり、挙手をする児童の数も増え、主体的に伝えようとする姿勢は見られるようになった。しかし、まだ伝え合いから学習が深まるほどのコミュニケーションの域には達していない。授業の中で既習事項を効果的に用いたり、コミュニケーションを双方向に図ったりすることには課題があり、気恥ずかしさや失敗を恐れる雰囲気は未だ存在する。アセスメントにより、児童同士の関係性の課題と、学習に対する課題の両方がまだ存在していると考えられる。

引き続き取組を継続し、学級と学習に対する安心感の両方を高め、より活発な伝え合い活動を実現させ、学びが深まっていく実践を探求していくことが今後の課題である。

## 謝辞

本研究を進めるに当たり、御指導をいただきました奈良教育大学教職大学院粕谷貴志教授、早稲田大学人間科学学術院井上典之教授に、心より感謝申し上げます。

また、授業実践を共にしてくださった筒井小学校英語専科遠藤孝先生、研究に協力いただきました筒井小学校の教職員の方々、そして、貴重な助言をいただいた匿名の査読者に感謝の意を表します。

## 参考・引用文献

- (1) 文部科学省（平成 29 年）『小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編』
- (2) 河村茂雄・田上不二夫（1997）「いじめ被害・学校不適応児童発見尺度の作成」『カウンセリング研究 30』 pp. 112-120
- (3) 河村茂雄（2004）「平穏に見える学級集団にひそむ代表的な崩壊の要因」（河村茂雄、藤村一夫、粕谷貴志、武蔵由佳 編著）『学級経営スーパーバイズ・ガイド小学校』図書文化 pp. 56-65
- (4) 粕谷貴志（2019）「大和郡山市立筒井小学校教員研修資料」（令和元年 7 月 25 日）
- (5) 井上典之（2019）「教員が自己成長できるために～アクション・リサーチを育てる～」奈良県立教育研究所所員研修（平成 31 年 4 月 19 日）
- (6) 文部科学省（2017）『小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック』 p. 118
- (7) 粕谷貴志（2010）「Q-U 結果と日常の観察を合わせた理解②～結果を見るとき視点」
- (7)（河村茂雄、粕谷貴志 著）『公立学校の挑戦【小学校】』図書文化 p. 102
- (8) 河村茂雄（2012）『学級集団づくりのゼロ段階』図書文化
- (9) 粕谷貴志、佐藤節子、岩田和敬、浅川早苗（2013）『集団の発達を促す学級経営』図書文化
- (10) 吉田研作（2017）『小学校英語 教科化への対応と実践プラン』教育開発研究所